



# LA NOUVELLE

## N°31

### AUTOMNE

東京外語仏友会  
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10  
本郷サテライト 東京外語会気付  
発行責任者 川口裕司 (1981/昭56)  
2023.10.1 発行

## 第27回仏友会総会

4月23日(日)、第27回仏友会総会・講演会を大手町サンケイプラザでハイブリッド方式で実施した(会場参加者37名、オンライン参加者20名)。

金澤会長代行(1968)の挨拶と会務報告の後、三浦省三幹事(1977)による会計報告、及び富田和義幹事(1968)による監査報告が行われ、原案どおり承認された。続いて、2023年度の幹事体制について金澤会長代行より提案があり、本学名誉教授の川口裕司氏(1981)が会長に就任し、副会長として和賀千恵子幹事(1970)、中村日出男幹事(1974)、山崎るり子幹事(1977)がサポートする新体制が承認された。金澤会長代行は本総会終了とともに幹事を退任することとなった。これまでのご尽力に感謝申し上げます。併せて、他の現行幹事全員の留任が承認された。

総会終了後に行われた川口裕司新会長の講演では、トルコ留学時代、フランス留学時代、静岡大学人文学部時代及び外語での思い出話が盛り沢山。会場参加者が学生時代に習った先生方の顔写真もあって、一同、懐かしい思いに駆られた。概要については、本人による下記のとおり記事を参照されたい。

懇親会では、昨年秋のフランス語劇「赤と黒」を演じた学生代表4人の紹介のほか、外語会理事長の寺田朗子氏(1975)の挨拶もあり、赤白のワイングラスを手に懇談の輪が広がった。コロナ禍が落ち着いたこともあり、秋のサロン仏友会では一層会場参加者が増えることを期待している。(幹事 中村日出男記)

## 外語での27年を振り返って —二つのCOE、言語文化学部、学術振興会

川口裕司 (1981/昭56)

「過去を振り返る」はフランス語で *jeter un regard sur le passé*、トルコ語で *geçmiş bir göz atmak* と言います。いずれも「過去へ視線を投げかける」と直訳でき、「振り返る」動作よりも「見る」という点が強調されます。ここでは在職中に経験した三つの出来事を取りあげて、年代順にそれらを振り返ってみたいと思います。

最初に思い出すのは21世紀COE (Center Of Excellence) (2002-06年度)とGlobal COE (2007-11年度)の十年間です。これは大学法人化の流れと関係があります。私が外語に着任した1994年にはすでに法人化が話題になっていました。実際に法



講演中の川口新会長

人化されたのは2000年のことです。その後すぐに21世紀COEが始まりました。大学に厳しい競争原理を持ち込み、研究分野ごとにトップを決めようとするコンペでした。学長の半ば強制的とも言える命令によって人文学(言語学)分野のプロジェクトリーダーにされてしまい、結局、外語は言語学と複合領域(地域研究)の二つの分野で採択されました。この二つの分野は今も外語の屋台骨です。毎年一億円ほどの予算がつきました。TUFSS言語モジュール (<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/>) はこの予算で開発され、今でも毎月300万近いアクセスがあります。開発当時は翻訳、出版、語学関連企業を集めてプレスリリースを行い、その後も複数の大企業からe-learningの共同開発について提案がありましたが、すべて頓挫しました。文部科学省によると科学研究費補助金で開発されたため、営利目的の利用、使用権の譲渡は越えられないハードルだったのです。一方COEの期間中にオランダのJohn Benjamins社と出版契約を結んでシリーズ本を出版することができました。しかしこれとても補助金を成果出版に充てることはできないという中程度のハードルがありました。「研究成果を出版できない!ふざけるな!」と言いたところでしたが、怒りをグッと飲み込んで学長と副学長に泣きつきました。直談判は外語のような小さな大学の大きなメリットです。当時の執行部はアジア・アフリカ言語文化研究所出身の方だったので、学部の方よりも研究に対して理解があり、なんとか出版にこぎつけることができました。これは外語での数少ない成功体験です。

次は言語文化学部の学部長になった2012-14年度までの三年間です。ちょうど学部が二つに分かれて新しい学部が発足したばかりだったので、いろいろなことが決まっておらず、ボトムアップで仕組みを考えるのに苦労したことを覚えています。ただ幸いにも優秀な事務の方々がおられ、何度となく助けられました。外語に来る前は静岡大学にいましたので、国立大学には慣れていたつもりが、外語は部局(学部)と全学(大学)の切り分けがとても曖昧で、会議の様子も違っていて最初は面食らうことが多かったです。くわえて外語ではコリドー・トーク(corridor talk)と呼ばれる村的な慣行が蔓延していて、私も学部

に係わるあまり重要ではない案件を廊下での立ち話で決めたことがありました。コンプライアンス遵守とスピード決裁という相容れない原理の間で築かれてきた小さな大学ならではの習わしだったので、最初は驚きつつも、これでいいのだと自分に言い聞かせました。

最後は日本学術振興会学術システム研究センターの主任研究員です。二カ所から給与をいただくと聞いて色めき立ちましたが、当初は専門研究員として大学から推薦されたはずが、突然に電話で主任研究員をお願いしたいと言われました。そもそも両者の違いは何なのかもわからないまま、かつ三年任期の予定がコロナ感染症のために四年間(2019-22年度)研究員を務めました。不安いっぱい始まりでしたが、この仕事は大学で研究教育と会議しか知らなかった私にとってやりがいのあるものでした。たとえば科学研究費補助金のシステムは公正平等な素晴らしい制度なのですが、その審査システムを評価して整備するのは研究員の職務なのです。また若い研究者をどのように育てていくのかについて研究員の間で侃々諤々の議論が長年続けられてきたことも新鮮な驚きでした。日本は世界大学ランキングでこのところ毎年下降を続けています。メディアはそれを経済の衰退と絡めて報道します。大学の試金石は何と言っても研究力です。入試のレベルや教育面だけに気をとられていると、時が経つうちに教員の研究力は低下し、結果として大学間での競争力を失っていくのだと思います。そのことを痛切に感じさせられた四年間でした。その期間が奇しくも外語最後の年月と重なったのは運命の巡り合わせでした。



総会会場に直接参加した会員の皆さん

## 第28回サロン仏友会のお知らせ

◆日時: 2023年11月19日(日)  
14:00~17:00

講演会並びに懇親会

◆会場: 大手町サンケイプラザ 201-202  
(東京メトロ大手町E1出口)  
講演会はオンライン同時配信。

◆講師: 鈴木光子氏 (1961/昭36)  
元スイス政府観光局長次長。  
旅行作家、翻訳家。

◆演題: 『駐日スイス公使が見た第二次世界大戦』の  
翻訳出版を振り返る

1939~1945年、中立国スイスの駐日公使だったカミーユ・ゴルジュが、戦後10年経って公表した戦中日記を中心に、C.ハウザーとP.Y.ドンゼの2人のスイス人教授が説き起こす、『歴史』と『記憶』の大命題。太平洋戦争の記憶が薄れていく現代で、何が歴史として残るのか?を問う著作。翻訳には相当の期間が必要と覚悟して、老人ホーム入り。足掛け5年の歳月をかけた600ページ近い大作完成までの苦労話を、熱く語っていただきます。(大阪大学出版局、2023年4月発売)

◆参加費: 会場=6000円、オンライン=無料  
(会場で通信費1000円/年もお受けします)

◆申込〆切: 11月10日(金)  
アドレス登録されている方には改めてご案内いたします。未登録で参加ご希望の方も下記アドレス宛てにメールでお申し出ください。

(担当: 吉田尚子 naoko0304358@gmail.com)



昨年10月に浅利演出事務所(野村玲子(りょうこ)主演)によって上演されたフランス古典劇『アンドロマック』をご覧になった藤原作弥氏(1962/昭37)が、『金融財政ビジネス』(時事通信社)に感想文を寄稿されました。今回、同氏より、この感想文(野村様宛の手紙形式)を仏友会会報誌で会員の皆様にシェアしてほしいとのご依頼がありましたので、以下に掲載いたします。(前会長代行 金澤脩介)

## 「アンドロマック」に想う

藤原作弥 (1962/昭37)

野村玲子さま。貴女(あなた)が主演・演出されたフランス古典劇「アンドロマック」、自由劇場の初日、興味深く拝見しました。

劇団四季は貴女が生を受ける前の昭和30年代、慶應大の浅利慶太、日下武史、東大の諏訪正人ら仏文科の演劇青年たちが、アヌイヤジロドウの現代劇を演じているうちプロに昇華したユニークな劇団です。その後欧米や日本の現代劇に取り組み、ミュージカルにまで進出しましたが、原点はフランス文学でした。「アンドロマック」はその象徴的作品です。

私は貴女のご主人だった浅利慶太氏とは、「ミュージカル李香蘭」の原作者としてお付き合いしましたが、実は私も仏文学徒、浅利さんとはほぼ同世代で、東京外国語大仏文科卒。ですから、浅利慶太氏らが芥川比呂志、加藤道夫氏らの指導で旗揚げした劇団四季の初期のフランス演劇作品はほとんど在学中に拝見しておりました。何しろ四季を見ていないと女の子と話ができな

せんでしたから。中でも古典劇のラシーヌは、大学1年生の時、鈴木健郎主任教授の仏文学史、永井順教授の「古典劇入門」の講義をしっかり聴いておりました。両教授ともラシーヌを論ずる時は大きな声でその一語一句を歌うように朗読したものです。今回、貴女が主演された「アンドロマック」は17世紀のフランス語で長

詩の朗読の史劇。抑揚をつけてせりふを吟じると自分がトロイ戦争時のギリシャ悲劇の主人公に成り切ってしまいます。

戦勝国と敗戦国の4人の男女、怒り、憎しみ、喜び、許し、希望…さまざまな愛が交錯しながらも、結局は、一方通行の恋の Rond (輪舞曲) のストーリー展開。浅利慶太氏は詩劇を「文学の立体化」と呼んでいました。私はその浅利演出のこの作品を、かなり前に拝見したことがありますが、今回、亡きご主人に代わって貴女自身が演出し主演なさった「アンドロマック」は、ご夫妻によるラシーヌの総決算ですね。プログラム所載の萩原朔美さんの解説を待たずとも、ラシーヌは三島由紀夫、木下順二、谷川俊太郎、田村隆一らが口をそろえて認めるように演劇の原点。そのラシーヌの神髄を貴女は現代日本で見事に表現してみせた!

舞台が終わって貴女にお礼のショート・メールを差上げた際に、「浅利慶太氏に観せたかった」と記しましたが、きっとご覧になっていたと思います。そして今回の成果を、いつも言っていた「言葉のイメージを、見事に、正確に駆使できれば、舞台は観客の心をとらえることができる」の好例と認めたでしょう。

特に愛した作品を定期的上演されてきました。ミュージカルでは「夢から醒めた夢」「ユタと不思議な仲間たち」そして「ミュージカル 李香蘭」。ストレートプレイでは「アンチゴヌ」、「この生命誰のもの」そして「アンドロマック」。いずれも私の好きな素晴らしい作品群。今年は「李香蘭」を楽しみにしています。

注記: ① 『金融財政ビジネス』(時事通信社)より転載。

② 野村玲子(りょうこ)主演のフランス古典劇『アンドロマック』は2022年10月22日~24日劇団「四季」が自由劇場で公演。

③ 藤原作弥氏: エッセイスト、ノンフィクション作家。元時事通信社記者、解説委員長; 元日立総合計画研究所社長; 元日銀副総裁。

## 《フランス語圏だより》

### 外務省員となって、 ベナンに住むようになるまで

三宅信也 (2017/平29、2019 大学院修了)

2012年、東京外大が2学部制に移行した年に入学し、2019年、平成から令和に年号が変わる年に大学院を修了して、外務省専門職員として就職しました。そして2020年、新型コロナウイルスの影響でフランス全土がロックダウンに入ったとのニュースを聞きながら、フランスでの語学留学に向けてフランス語の勉強を続け、ロックダウンが解除された後、2020年夏からストラスブールでの2年間の語学研修の機会を得ました。今は日本を遠く離れて西アフリカに赴任し、在ベナン日本国大使館に勤務しています。



大学1・2年次は8時30分開始の1限目を含む週5コマのフランス語の授業を受け、2年次には語劇で舞台上でフランス語で80分間演じ通した経験は、フランス語を体系的に学ぶ貴重な機会となりました。その後、3年次夏から派遣留学生としてパリ政治学院で学んだ1年間は、フランス語「で」学ぶために必要な語学力を伸ばせただけでなく、生活(サバイバル)するための語学力を鍛える貴重な機会ともなりました。パリに到着して間もなく、アパートで使う物を買おうにも、「皿、スプーン、フォーク、ナイフ」と辞書なしではすぐに言えないことに気がついて唖然としたのは、今となってはいい思い出です。その数か月後、ヨーロッパ旅行中にパスポートと滞在許可証の入ったカバンを置き引きされ、なんとかフランスに戻ってくるや否

## フランス語とロダン・アート

田中孝樹 (1978/昭53)

今から40年以上前のことです。フランスのロダン美術館で、日本人彫刻家として初めて佐藤忠良氏の個展が開催されました。当時、外語の大学院生としてパリ留学から帰国する直前だった私は、縁あって先生の鞍持のアルバイトをすることになりました。これが私にとってロダン・アートとの出会いとなりました。



アテンドや取材通訳を通じて先生の芸術論や人生観に触れ、たった4、5日間の仕事が終わる頃にはそのお人柄にすっかり魅了され、彫刻への興味が深まっていました。

帰国して修士を終了後、私はなんの迷いもなく、株式会社現代彫刻センターの戸を叩きました。パリの佐藤展を企画していた会社で、ロダン美術館の極東代理店でもありました。すぐにロダン担当となり、以後国内美術館を巡回する数々の大規模な展覧会も企画することになります。種々の打合せのため現在に至るまで40年余り、平均すると年に1、2回ロダン美術館を訪ねた計算になるでしょうか。いつものように通用口を入っていくたびに、すっかり気心の知れた学芸員の方々は待っていました。とばかりに最新の研究内容を教えてくれたりします。気がつけば「門前の小僧習わぬ経を読む」状態で、いつしかロダンにはまってしまっていました。

2005年に、淡交社から「ロダン事典」を出版しました。ロダン美術館の全面協力のもと、私を含めた4名が共同編集したのですが、事典にふさわしい年表がどうしても見当たりません。そこで主にフランス語の研究書・カタログを7冊あまり積み上

## 外国人教師がつづる外語大の思い出 (No.4)

### Les Années Gaigo

Hervé Couchot

Venant tout juste de passer le cap des 25 ans de Japon, il est inévitable qu'un séjour d'une aussi longue durée soit composé de plusieurs époques, chaque strate temporelle venant recouvrir les autres sans complètement les effacer. Celle des années Gaigo a coïncidé avec mon arrivée au Japon. Ce fût celle des premiers pas et des premières impressions, des surprises et des apprentissages, à commencer par celui de mon nouveau métier de professeur de français comme langue étrangère, une langue qui me devenait justement un peu plus étrangère à mesure que j'essayais de la rendre familière à mes étudiants : comment expliquer les subtiles nuances d'utilisation des différents temps du passé ? Pourquoi parle-t-on en français *du* (redoutable) natto, auquel on peut (ou non) préférer la dégustation d'une umeboshi ? Je ne faisais que semblant de répondre, non sans un certain aplomb, à ces questions d'étudiants qui me rendaient moi-même perplexe...



Il y a en fait deux Gaigo qui se côtoient dans ma mémoire, associés à deux lieux différents : le premier Gaigo est celui de l'ancien campus situé à Nishigahara Yonchome, près de Sugamo, le fameux « Harajuku pour papis et mamies », suivant le mot d'un plaisant collègue. On y accédait par le dernier tramway

や、パリ警視庁の滞在許可証窓口で、滞在許可証再発行は必要かどうか、窓口担当者と小一時間討論することにもなりました。逆境の中で人は成長するとはよく言ったもので、派遣留学の1年間で遭遇したトラブルは数知れず、トラブル対処を通じてフランス語力が伸びたと言っても過言ではありません。

外務省入省後にはストラスブールでの研修の機会を頂き、国立行政学院(ENA)とストラスブール大学法学部で学びました。講義を通じて政治・外交・国際法関係のフランス語を身につけ、カリキュラムの一貫で行ったインターンシップを通じて、実務では筆記表現力(書類作成能力)が重要なのももちろんのこと、何よりも口頭表現力が不可欠で、仕事の合間の何気ない会話に参加できることも大切なスキルだと痛感しました。また、研修中に知り合った世界各地の友人たちとは、文字どおり物理的な距離感を探り合いながら、コロナはもうたくさんだと言って、オフタイムには時に「3密」を恐れぬ集まり方をしていました(時効ということで...)。コロナ禍をフランスで過ごしたことで、実は人間の本性は万国共通で、行動がお国柄や周辺の人々に合わせて多少異なっているだけなのかもしれない、と考えさせられました。

今、ベナンでは、経済の中心地である最大都市、コトヌ市に在住・勤務しています。最大都市の恩恵で、1店だけとはいえフランス系大型スーパーマーケットもあり、中華食材店もいくつかあるので、一見してフランス研修時代と大差ない生活ができています。とはいえ、輸入品に大きく頼るこの国では、高級店と言われているフランス系スーパーマーケットでも長期欠品が珍しくない上に、この店で買った茄子から芋虫が出てきた、クラッカーの袋から羽虫が出てきたなど、日本では聞くことのない事象に事欠きません。また、公用語であるフランス語も全

げ、不明点、曖昧な点を都度ロダン美術館に問い合わせながら自前で作り、さらに仏語原稿の翻訳にも取り組みました。

2002年に現代彫刻センターが解散した数年後に自分で立ち上げた「株式会社アールアンテル」で、主にパブリックアートのプロデュースに携わりながら現在に至っています。フランス語の学習、パリ留学の延長線上にロダンがあり、アートという一生の仕事が待っていたのです。



## 仏友俳句サロン 1

吉田林檎(「知音」同人)

銀漢といふにはうすしピアノ打つ  
安東次男



安東次男先生(俳句の慣例に従い以後「次男」と呼びます)は1966年から1982年まで東京外国語大学の教授を務めていた。仏友会会員の間でも「アンツグ先生」として親しみをもって語られることがある。俳壇で聞く名前だったので仏友会で初めて耳にした時私は小さな興奮を覚え、同時にぐも感じたものである。

1919年生まれの子男は加藤楸邨に師事。戦前戦後を通じて楸邨主宰の俳誌「寒雷」に俳句、俳論を発表していた。一時俳句

de Tokyo mêlant les jeunes têtes bien faites des étudiants à celles, grisonnantes et chenues, de leurs aînés. Nous sommes avant internet, avant les emails qui s'amoncellent chaque matin dans les boîtes de nos messageries ; avant le confort des salles climatisées, suréquipées d'ordinateurs et de projecteurs, de téléviseurs et de micros : le rouleau du fax de la petite salle commune du département de français, péniblement rafraîchie par un unique ventilateur sur pied, doit régulièrement être remplacé chaque lundi matin, une fois les liasses de messages ramassées. Les salles de cours ressemblent davantage à de vastes garages ou à des chaufferies aménagées avec des bancs et des tables. Les étés dans les bureaux sont caniculaires. Il n'est pas rare que nous « tombions » la chemise pour pouvoir résister à la torpeur qui nous ramollit et continuer d'y travailler. D'autres images, aussi nettes et gracieuses que celles d'une *ukiyoe*, me sont restées de ces deux premières années, fraîches et joyeuses, où l'on ne parlait pas encore de « FLÉ » ni d'« apprenants » : les flèches du cercle de *Kyûdo* dont nous apercevions furtivement les traits en contrebas de la salle des professeurs, les salles de cours, entièrement métamorphosées par l'imagination des étudiants au moment de la fête de l'université : grottes de flamenco andalouses, bars à vodka moscovites et même une brasserie parisienne avec serveurs francophones proposant du *vrai* café ... Les langues et les palais y étaient réellement en fête.

Après le déménagement à Tama, c'est un autre Gaigo qui commence, plus moderne et spacieux, avec son jet d'eau pour les grandes occasions digne d'un film de Jacques Tati ; mais

国民が流暢に操れるとは限らず、職務遂行に求められるフランス語とは別に、日常生活では簡単に誤解を生まないフランス語の運用力を日々試されています。

大学入試前にあまり深く考えることなく専攻言語として選んだフランス語が「一生使っていくツール」となり、「飛行機で東京から20時間以上離れたベナンで仕事をするようになる」と、東京外大在学中の10年前の私に伝えたならば、おそらく信じないでしょう。しかし、国際的な仕事をしたいという漠然とした思いは当時からあったので、東京外大に入学したこと自体が、現在のベナン勤務に繋がる運命の伏線だったのかもしれない。そして、東京外大在学中や外務省入省後のフランス研修中に知り合った、自由闊達で主張明確な世界各国出身の学生との交流が、今の私の基礎になっていることは間違いありません。

東京外大入学から今まで、良かれ悪しかれ、歴史的な節目に立ち会ってこられました。今後もフランス語圏内外で、色々な経験を積んでいきたいと思います。



フランス系スーパーマーケットのあるショッピングモール

を離れて詩の世界にいたが、1990年頃から俳句の世界に戻った。2002年逝去。

俳句の世界では評論の書き手として知られている。俳句を離れている間も松尾芭蕉や与謝蕪村についての著作を多数世に出した。句集「流」(1996年)で第12回詩歌文学館賞を受賞するなど俳句の実作でも確かな実績を残している。

次男と同様楸邨門下の金子兜太は回顧録で「あの時アンツグが…」といった口調で武勇伝を語っている。

掲句の季語は「銀漢」で秋。天の川のことで。天候によるものなのか光がうすくて心もとない思いである。一方ピアノを打つ音や指の感触には確かな実感がある。出征の不安を逃れることはできないが、今自分ができることは地に足をつけてしっかりと立つことなのだ。

発表されたのは出征直前の1942年(昭和17年)10月。当時は東京でもはっきりと銀漢を認識できていたことであろう。普段確たる存在感があるからこそ「うすし」と感じたのだ。「ピアノ打つ」は指一本で出す一音であろう。「打つ」のは太鼓や柱時計など一音一音を生み出す動きであり、ピアノの演奏には適さない表現だ。

確かなものが見えない時の不安を打ち消すのが指一本で奏でるピアノの一音とは。存在の心もとなさを浮き上がらせる一句であり、現代を生きる我々の胸を打つものがある。

※吉田林檎は吉田尚子(1994/平6)の俳号です。

今号から俳句<Haiku>の記事を書かせていただくことになりました。きっと楽しんでいただけたらと思います。外大やフランスに関わる俳句を今後紹介してまいります。

les étudiants n'ont pas changé. Il y a toujours cette envie d'apprendre, de s'exprimer, ce gai savoir linguistique si spécial qui reste pour moi attaché à jamais à cette université. Nous rions beaucoup pendant et en dehors des cours mais je suis toujours ému, à la fin de chaque semestre, en écoutant les sketches présentés par les étudiants de 2<sup>ème</sup> année devant la classe qui attestent des impressionnants progrès accomplis dans toutes les compétences.

Depuis ces trois magnifiques premières années à Gaidai, qui ont bouleversé toute ma vie, de l'eau a coulé sous les ponts de la Sumida. J'ai changé plusieurs fois d'université et de quartier de résidence à Tokyo mais je reste toujours au fond de mon cœur un professeur de Gaigo, ce nom bref qui résonne autrement pour ceux qui ont eu la chance d'y enseigner ou d'y étudier et dont les trois syllabes seront pour toujours associées à mes années Japon.

※FLÉ=Français Langue Étrangère

＜東京外語仏友会 新幹事体制＞(2023年4月～)

会長：川口裕司(1981/昭56)  
副会長：和賀千恵子(1970/昭45)、中村日出男(1974/昭49)、山崎り子(1977/昭52)  
幹事：富田和義(1968/昭43)、勝亦杏子(1971/昭46)、三浦房子(1976/昭51)、三浦省三(1977/昭52)、大谷恵子(1978/昭53)、椎名隆一(1982/昭57)、鈴木洋美(1991/平3)、吉田尚子(1994/平6)、谷川徹三(2000/平12)、大杉あづさ(2013/平25)